

- \*ガラテヤ人への手紙が書かれた背景には、ユダヤ人クリスチャンたちが、異邦人でも割礼を受け、モーセの律法を守らなければ救われないと主張して、教会に大きな影響を与えていたことがある。その主張に対して、パウロは、「律法の行いによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行いによって義と認められる者は、ひとりもないからです。」（ガラテヤ2：16）と反論する。旧約の律法は神から与えられた貴重なものであるが、これは私たちに罪を悟らせるために必要なものであって、救いのためには、今やイエス・キリストの十字架と復活を信じる信仰により、恵みの生活を送る時代になったのである。
- \*宗教改革の3つの原理の内の一つ「信仰のみ」は、人間が救われるのは信仰以外に必要な、ということをもルターはこのガラテヤ人への手紙とローマ人への手紙から再確認したのである。当時、教会は「贖宥券（免罪符）」を買うことで天国に行ける（救われる）と偽りの口実でローマ教皇の資金作りに協力していた。信仰がおろそかにされたのである。
- \*「信仰のみ」ならば「（良い）行い」は必要ないのか、の問いにはルターは答える。「何より先に、わざ（行い）により、わざを行った後で神の御心を得ようという不遜な態度に出るならば、それは全く欺瞞であって、外側で神を敬いつつ、内側では自分自身を偶像に仕立てているのである。」「良いわざが良い人間をつくるのではなく、良い信仰が良いわざを生み出す。」信仰があれば、神は良い行いに歩むようにその行いを備えてくださっているのである。（エペソ2：10参照）
- \*「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」（ガラテヤ2：20）パウロは、律法を守ることに汲々としていた自分、律法をおろそかにしているとクリスチャンをさばいて投獄までしていた古い自分を彼方に葬り去って、今は主キリストにすべてをささげる全く新しい生き方をすることができるようになった。自分が「生」の担い手ではなく、神が、キリストが、聖霊が「生」の担い手になって私を生かしてくださっているのだということを実感した。大きな喜びを得たのである。それは、信仰による神の一方的な恵みなのである。私たちも同様である。感謝しつつ歩みたい。